

西北民族誌

著者	樫永 真佐夫
図書名	ベトナム文化人類学文献解題 : 日本からの視点. 未成道男編.
開始ページ	97
終了ページ	101
出版年月日	2009-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008976

第12章 西北民族誌

ラオス、中国との国境をもつ紅河以西の北部内陸部が西北地方である。地勢的、言語・民族的に見て、現ライチャウ省、ソンラー省、ディエンビエン省、ホアビン省4省全域と、ラオカイ省とイエンバイ省の紅河以西、タインホア省とゲアン省の山地部を、本稿では西北地方として扱う。この地域には、タイ・ターイ語系、ベト・ムオン語系、モン・ザオ語系、モン・クメール語系、チベット・ビルマ語系などの言語を話す諸集団が居住している。伝統的には、山間盆地で灌漑による稲作を行うターイやムオンが、ムオン (Mường) とよばれる盆地国家を築き、焼き畑を主産業とする他の民族集団に対する政治的支配を及ぼしてきた。以下では、この西北地方の諸民族に関する人類学的研究について、おもに現地調査資料に基づく民族誌的研究と、歴史に重点を置いた文献研究に分けて整理する。

第1節 民族誌的研究

植民地期以降、西北地方における人類学研究ではターイに関するものが質量ともにもっとも充実している。ついで、ムオンに関する詳細な現地調査データを盛り込んだ研究が見られる。これは一つには政治的理由がある。19世紀以前、ターイとムオンの両民族は、ベトナム王朝から比較的自律度の高いムオン政体を築いていた。とくにターイは隣接して居住するモン・クメール語系・チベット・ビルマ語系・カダイ語系の諸民族や、モン、ザオに対してもその政治的支配を及ぼしていた。そのため、この地域を植民地支配しようとしたフランスの政治的関心を惹いたのである。さらに、ディエンビエンフーでの敗北によるフランス撤退 (1954) 後は、ターイを中心とする諸民族の政治的、文化的同化を視野に入れた文化研究がベトナム民主共和国下で必要視された。もう一つの理由は、ターイやムオンは、盆地を中心に居住し、古来からの物資流通路や仏領期に建設された国道からのアクセスが比較的容易な場所に村落が立地していることによる。

もちろん、ターイやムオン以外の民族に関する文化研究は量的に少ないとはいえ、ターイやムオンに関する文化研究と同様、19世紀後半に始まるフランス植民地期にすでに開始されている。以下では、植民地期 (-1954)、社会主義ベトナム期 (1955-1987)、ドイモイ期 (1988-) の3期に区分して、ベトナム西北地方における民族誌的研究を概観する。

1. 植民地期：19世紀から1954まで

おもに19世紀末頃から、探検家、宣教師、軍人、行政官による報告や民族誌 [Cuisinier 1946] [Robert 1941] や辞典 [Diguët 1895] [Minot 1940] がフランス語で出版され始める。仏領期には、民族の社会や文化の項目ごとの記述をとおしてその社会と文化の全体像を描こうとする民族誌の記述形式がすでにできあがっていた。その構成は、まず、人口や地理的概況について記し、それから生業経済、親族・家族・婚姻習俗、物質文化、親族・社会構造、儀礼、伝承・芸術を記述するのが常套である。また、雑誌論文としては、1901年創刊の『フランス極東学院紀要』

(*Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*) をはじめとする学術誌のいくつかに、西北地方諸民族の歴史や文化に関する調査記事が相次いで確認できる。また、民族概説書 [Abadie 1924] [Diguët 1908] [Lunet de Lajonquiere 1906] の記述にも、筆者による各民族の文化的特徴に関する知見は反映されている。

仏領期におけるフランス人の調査データをもとに執筆された代表的なタイ研究としては、[Bourlet 1907] [Diguët 1895] [Lafont 1955] [Maspéro 1916] [Robert 1941] [Roux 1954] [Silvestre 1918] などがあげられる。また、ムオン研究では、[Cuisinier 1946] がとりわけよく知られている。また1953年に『フランス連合の民族誌2巻 アジア、オセアニア、アメリカ』[Leroi-Gourhan; Poirier 1953] がフランスで出版されたが、その巻末の文献目録は、その書にフランスにおいて出版されたインドシナにおける人類学関連の文献が広く掲載されていて、研究者にとって有効な情報源の一つである。とくにタイに関しては、フランス人による研究をレビューした論文[Lemoine 1997] も出版されていて、これによって過去100年あまりのフランス人によるタイ研究の軌跡を知ることができる。

仏印進駐前後1940年代には、インドシナへの領土拡大をもくろむ日本でも、[Abadie 1924] [満鉄東亜経済調査局(編)1943]などでフランス語民族誌が日本語に翻訳され、紹介されている。

2. 社会主義化の時期

：西北自治区時代(1955-1975)とベトナム社会主義共和国下での社会主義化時代

ディエンビエンフー戦勝1周年記念に、諸民族の平等という理念に基づき、多民族が混住するベトナム西北地方に民族自治区(成立時はタイ・メオ自治区であったが、後に西北自治区と改称)が誕生した。この時期は、自治区の教育幹部を中心とする現地の知識人たちによって民族学データが蓄積された時期であり、タイ研究におけるダン・ギエム・ヴァン(Đặng Nghiêm Vạn)、カム・クオン(Cầm Cương)、カム・チョン(Cầm Trọng)、ムオン研究におけるグエン・トゥ・チ(Nguyễn Từ Chi)をはじめとするベトナム人類学者が国際的に知名度を得ていく時期でもあった。西北自治区時代(1955-1975)に自治区内での調査研究に基づくインパクトのある業績として、[Cầm Trọng 1978] [Dang Nghiem Van 1972] [Đặng Nghiêm Vạn, chủ biên 1977] [Nguyễn Từ Chi 1971] などがある。とくに[Dang Nghiem Van 1972] [Nguyễn Từ Chi 1971]は英仏二言語で発表されたために、ベトナム国外のタイやムオンの研究者に注目された。[Cầm Trọng 1978] [Đặng Nghiêm Vạn, chủ biên 1977]は、コンドミナス[Condominas 1980]のタイ系民族の社会空間に関する理論展開に大きな影響を与えるのみならず、タイの伝統社会の構造やタイとキンの民族間関係に関する日本や欧米の研究者の関心を喚起した。

自治区の時期に、権威あるベトナム人類学学術誌『民族学雑誌』(*Tạp chí dân tộc học* 1974年創刊)の前身となる『民族雑誌』(*Tạp chí dân tộc, Tạp san dân tộc*)の刊行が首相府民族班(のちに中央民族委員会)から始まった(1958年)。『民族雑誌』には、社会主義的集団化の進展状況との関わりから、自治区各地のさまざまな民族の文化や社会に関する報告が多数掲載されている。

ベトナム戦争が終結して自治区が解体した後は、むしろベトナム人による調査研究も停滞した観がある。[Cầm Trọng 1987] [Nguyễn Văn Huy 1985]などの著書は出版されているが、かならずしもこの時期に集中的な調査は行われていない。いっぽう、日本では、[綾部 1971] [加治 1986] [菊池 1989] [古田 1979] [森 1989] [吉沢 1982]など、自治区期までのベトナム人、フランス人が提供した民族誌データに基づき、インドシナの民族間関係やタイ系民族の文化的特徴に関する分

析的な研究が蓄積された。

3. ドイモイ以降（1990年代以降）

ドイモイ以降、ベトナム人、外国人による人類学的研究の量は次第に増加するが、総体としては、タイ研究に重点がある。

タイ研究に関しては、ベトナムでベトナム・タイ学プログラム（Chương trình Thái học Việt Nam）が発足し、研究者のみならず各地の郷土誌家も加わり、1991年以来3回の大規模な研究集会の開催と3冊の論文集の刊行という実績を出している。これらの論文集の内容は、タイに関する人類学的な研究が中心であるが、タイ、ヌンなどの他のタイ・タイ語系民族のみならず、ムオンをはじめとする隣接して居住している諸民族との言語、文化、政治をめぐる関係に関する論文も収録されている〔榎永 2004〕。

いっぽう、とくに1990年代半ば以降になると、タイ以外のタイ・タイ語系民族〔Lò Ngân Sùn 1998〕〔Phù Ninh; Nguyễn Thịnh 1999〕、モン〔Cư Hòa Văn; Hoàng Nam 1994〕、チベット・ビルマ語系やモン・クメール語系に属する人口規模が小さく、道路へのアクセスが悪い僻地の少数民族〔Khổng Diễn, biên 1999; 2000〕〔Phạm Huy 1997〕〔Phạm Huy 1998〕〔Trần Bình 1999〕に関する民族誌がベトナムで相次いで出版されるようになった。ベトナムの経済発展のいっぽうで、国内のインフラ整備、経済や教育の格差是正の問題が重要視されていることと無関係ではなからう。なお、こうした民族誌記述形式の点では、仏領期の網羅的民族誌の形式が継承されている。

1990年代以降に研究が増加した理由は、長期の定点観測調査には依然として困難が伴うとはいえ外国人による調査研究がある程度開放されるようになったこと、ベトナム人研究者と外国人研究者の研究交流の場が急増したことにある。ムオンに関しては、文献研究と現地調査を複合させた宇野のすぐれた歴史人類学的な研究が発表されている〔宇野 1999〕。タイに関しては、榎永による調査研究に基づき、村落の社会経済と伝統的な文化活動の持続と変化に関する調査研究が進展している〔榎永 2000a; 2000b〕。もちろん、日本人研究者以外にもタイ人、フランス人、アメリカ人などが学術調査や開発援助と結びついた調査などを展開している。

第2節 歴史的文献研究

現在の西北地方の住民が近代以前にベトナム王朝や中国と取り結んでいた政治的、文化的関係は、仏領期の民族誌以来の主要テーマであるが、漢文資料に基づいた研究としては、〔山本（編）1975〕〔Phan Huy Lê 1962〕が古典的な研究として知られている。そのほかには、ベトナム側の漢文資料と人類学的文献に依拠しながら前近代の近代以前のキンと現西北地方住民との政治的関係を意欲的に再構成しようとした〔嶋尾 1984〕が重要である。

漢文資料以外に、西北地方の歴史や社会についてはタイ文字資料が継承されている。これら文字資料に対して、仏領期のフランス人がすでに学問的関心を寄せていたが、本格的にこれら文字資料の分析が始まったのは自治区の時期である。以降、年代記、慣習法をはじめとするタイ文字文献の内容の詳細が紹介され〔Cầm Trọng; Cầm Quỳnh 1960〕〔Đặng Nghiê m Vạn, chủ biên 1977〕、同時に、これらタイ文字文献記述に基づいた西北地方の民族間関係、歴史、タイの社会的特質に関する研究も始まった〔Cầm Trọng 1978〕。この流れは現在まで継承され、〔榎永

2002; 2003] [Cầm Trọng; Kashinaga 2003] [Cầm Trọng; Phan Hữu Dật 1995] [Ngô Đức Thịnh; Cầm Trọng 1999] などの成果が引き続き発表されている。

こうした研究は、現地調査によるデータとタイ文字資料双方に目配りしながら社会を歴史的に再構成しようとした点で、仏領期までの研究とは一線を画すものであったが、タイ文字資料に対する資料批判が不十分であるという批判は免れがたい。[武内 2003] では、さまざまな漢文資料とフランス語資料から近代の西北地方をめぐる政治的状況が読み解かれ、歴史研究においてタイ文字資料の記述を盲信することに警鐘を鳴らしている。今後、より実証的な歴史研究が展開していくものと思われる。(樫永真佐夫)

参考文献

(和文)

- * 綾部恒雄. 1971. 『タイ族：その社会と変化』 東京：弘文堂.
- * 宇野公一郎. 1999. 「ムオン・ドンの子孫：ベトナム北部のムオン族の領主家の家譜の分析」『東京女子大学紀要論集』 49(2): 137-198.
- * 加治明. 1986. 「タイ系諸族の政治 = 社会組織についての一考察：インドシナ半島北部を中心に」『社会人類学の諸問題：馬淵東一先生古稀記念』 5-26 頁所収. 東京：第一書房.
- * 樫永真佐夫. 2000a. 「市場経済の中の伝統染織物生産：ベトナム黒タイ村落の事例」『民族学研究』 65(3): 101-116.
- * 樫永真佐夫. 2000b. 「ベトナムにおける黒タイ語表記の変遷：少数民族の文字文化」『ベトナムの社会と文化』 2: 133-178.
- * 樫永真佐夫. 2002. 「〈ムオン・ムオイの黒タイ慣習法〉について」『国立民族学博物館研究報告』 26(3): 361-447.
- 樫永真佐夫. 2003. 「(注釈) クアム・トー・ムオン：ムオン・ムオイの黒タイ年代記」『ベトナムの社会と文化』 4: 163-243.
- 樫永真佐夫. 2004. 「ベトナム・タイ学プログラム」『民博通信』 104: 22-23.
- * 菊池一雅. 1989. 『インドシナの少数民族社会誌』 東京：大明堂.
- * 嶋尾稔. 1984. 「ベトナム黎明と山地少数民族」卒業論文（東京大学文学部東洋史学科）.
- * 武内房司. 2003. 「デオヴァンチとその周辺：シップソンチャウタイ・タイ族領主層と清仏戦争」『民族の移動と文化の動態：中国周辺地域の歴史と現在』 塚田誠之（編）645-708 頁所収. 東京：風響社.
- 古田元夫. 1979. 『ベトナムからみた中国』 東京：日中出版.
- * 満鐵東亞經濟調査局（編）. 1943. 『印度支那民族誌』 東京：満鐵東亞經濟調査局.
- * 森幹男. 1989. 「タイ系諸族の『クニの柱』祭祀をめぐって 1：タイ系文化理解の一視角」『アジア・アフリカ言語文化研究』 38: 91-109.
- 山本達郎（編）. 1975. 『ベトナム中国関係史：曲氏の抬頭から清仏戦争まで』 東京：山川出版社.
- * 吉沢南. 1982. 『ベトナム：現代史のなかの諸民族』 東京：朝日出版社

(欧文・越文)

- * Abadie, Maurice. 1924. *Les races du Haut-Tonkin de Phong-Tho à Lang-Son*. Paris: Société d'éditions géographiques, maritimes et coloniales.
- * Bourlet, Antoine. 1907. *Les Thay*. *Anthropos* 2: 354-373.
- * Cầm Trọng. 1978. *Người Thái ở Tây Bắc Việt Nam*. Hà Nội: Nxb. Khoa học xã hội
- * Cầm Trọng. 1987. *Mấy vấn đề cơ bản về lịch sử kinh tế xã hội cổ đại người Thái Tây Bắc Việt Nam*. Hà Nội: Nxb. Khoa học xã hội.

- *Cầm Trọng; Cầm Quỳnh. 1960. *Quả tổ mương (Kể chuyện bản Mường)*. Hà Nội: Nxb. Sử học.
- *Cầm Trọng; Kashinaga Masao, sưu tầm, nghiên cứu và dịch. 2003. *Danh sách tổ tiên họ Lò Cầm, Mai Sơn-Sơn La*. Hà Nội: Nxb. Thế giới.
- *Cầm Trọng; Phan Hữu Dật. 1995. *Văn hóa Thái Việt Nam*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.
- *Condominas, Georges. 1980. *L'espace social à propos de L'Asie du Sud-est*. Paris: Flammarion.
- *Cư Hòa Văn; Hoàng Nam. 1994. *Dân tộc Mông ở Việt Nam*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.
- Cuisinier, Jeanne. 1946. *Les Mường : géographie humaine et sociologie*. Paris: Institut d'ethnologie.
- *Dang Nghiem Van. 1972. An outline of the Thai in Vietnam. In *Vietnamese studies 32 : Ethnographical data 1*, pp. 143-196.
- *Đặng Nghiêm Vạn, chủ biên; Cầm Trọng; Khả Văn Tiến; Tông Kim Ân. 1977. *Tư liệu về lịch sử và xã hội dân tộc Thái*. Hà Nội: Nxb. Khoa học xã hội.
- Diguet, Édouard Jacques Joseph. 1895. *Étude de la langue Tai : précédée d'une notice sur les races des hautes régions du Tonkin, comprenant grammaire, méthode d'écriture Tai et vocabulaires*. Hà Nội: F-H Schneider.
- *Diguet, E. 1908. *Les Montagnards du Tonkin*. Paris: A. Challamel.
- *Khổng Diễn, biên. 1999. *Dân tộc Khơ Mú ở Việt Nam*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.
- *Khổng Diễn, biên. 2000. *Dân tộc La Hủ ở Việt Nam*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.
- *Lafont, Pierre-Bernard. 1955. Notes sur les familles patronymiques Thai Noirs de Son-la et de Nghia-lo. *Anthropos* 50: 797-809.
- *Lemoine, Jacques. 1997. Panorama des auteurs français sur les Tải du Việt-nam occidental et leurs prolongements au Laos. *Péninsule* 34: 39-80.
- Leroi-Gourhan, André; Poirier, Jean. 1953. *Ethnologie de L'Union Française (Territoires extérieurs), tome second. Asie, Océanie, Amérique*. Paris: Presses Universitaires de France:
- *Lò Ngân Sùn. 1998. *Bước đầu tìm hiểu văn hóa người Dáy*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.
- *Lunet de Lajonquière, Etienne. 1906. *Ethnographie du Tonkin septentrional*. Paris: Leroux.
- *Maspéro, Henri. 1916. De quelques interdits en relation avec les noms de famille chez les Tải-Noirs. *BEFEO* 16: 29-34.
- Minot, Georges. 1940. Dictionnaire Tảy Blanc Français : avec transcription Latine. *BEFEO* 40: 1-237.
- Ngô Đức Thịnh; Cầm Trọng. 1999. *Luật tục Thái ở Việt Nam (Tập quán pháp)*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.
- *Nguyễn Từ Chi. 1971. Croquis Muong. In *Etudes vietnamiennes 32 : Données ethnographiques 1*, pp. 55-161.
- *Nguyễn Văn Huy. 1985. *Văn hóa và nếp sống các dân tộc nhóm ngôn ngữ Hà Nhi-Lô Lô*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa.
- *Phạm Huy. 1997. *Một phần chân dung dân tộc La Hủ (Nhất ký điền dã)*. Lai Châu: Sở văn hóa thông tin Lai Châu.
- *Phạm Huy. 1998. *Bước đầu tìm hiểu văn hóa dân tộc Cống*. Lai Châu: Sở văn hóa thông tin Lai Châu.
- Phan Huy Lê. 1962. *Lịch sử chế độ phong kiến Việt-Nam*, tập 2. Hà Nội: Nxb. Giáo dục.
- *Phù Ninh; Nguyễn Thịnh. 1999. *Văn hóa truyền thống Cao Lan*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.
- *Robert, R. 1941. *Notes sur les Tay Dèng de Lang Chánh, Thanh-hóa, Annam*. Hanoi : Imprimerie d'Extrême-Orient.
- Roux, Henri. 1954. Tai Blancs et Tai Noirs : Tai Don ou Tai Khao et Tai Lam ou Tai Dam. In *France-Asie 9(92/93) : Quelques minorités ethniques du Nord-Indochine*, pp. 359-385.
- *Silvestre, Capitaine. 1918. Les Thai Blancs de Phong-tho. *BEFEO* 18(4): 1-56.
- *Trần Bình. 1999. *Dân tộc Xinh Mun ở Việt Nam*. Hà Nội: Nxb. Văn hóa dân tộc.